

## 三重県鈴鹿市方言の後部3拍複合名詞のアクセントについて\*

平田 秀

キーワード：三重県鈴鹿市方言、後部3拍複合名詞、-③型、-②型

### 要旨

三重県鈴鹿市方言の後部3拍複合名詞のアクセント規則は、以下の通りである：1. 高起式の場合、語末から数えて3拍目にアクセント核がおかれる(-③型)。2. 低起式の場合、語末から数えて3拍目にアクセント核がおかれるものと、語末から数えて2拍目にアクセント核がおかれる(-②型)ものに分かれる。後部要素単独のアクセント型や特殊モーラは-②型の出現に関与しない。2. は現代京都市方言の複合語アクセント規則とは異なっており、院政期京都方言の複合名詞アクセント規則が鈴鹿市方言において部分的に残存しているものと考えられる。

### 1 本論について

本論では、三重県鈴鹿市方言<sup>1</sup>の後部3拍複合名詞アクセント規則について述べる。同方言は、上野善道(1987)、中井幸比古(2002)で述べられている通り、現代京都市方言、大阪市方言、神戸市方言、津市方言、伊勢市方言などと同じく中央式諸方言に属する。

第2節でアクセント体系を概観したのち、第3節で後部3拍複合名詞のアクセント規則を詳述する。第4節で、同方言と現代京都市方言の相違点を取り上げ、前者において後者では失われた古形が保持されていると考えられる現象がみられることを述べる。

### 2 アクセント体系

鈴鹿市方言のアクセント体系は、現代京都市方言と同様の体系<sup>2</sup>であり、以下の(1)(2)の特徴を持つ。

(1) 下げ核<sup>3</sup>を持つ。以降本論では単に「核」と呼ぶ。

\* 本稿の執筆に当たり、指導教員である小林正人先生、ならびに上野善道先生に貴重なご指導をいただいた。ここに記すとともに、深くお礼申し上げる。なお、本稿におけるいかなる誤りも筆者の責任である。

<sup>1</sup> 話者は平田美恵氏(1925年生・鈴鹿市稲生地区在住)である。

<sup>2</sup> 現代京都市方言のアクセント体系については、中井(2002: 12-14)を参照。現代京都市方言にみられる1拍語短形H1型および低起式の語末拍に核を持つ語における最終拍の拍内下降はみられないといった細かな差異はあるが、本論の論旨には影響しない。

<sup>3</sup> 次の拍を下げる働きを持つ。上野(1992: 11)を参照。拍とは、上野(2006: 2)で述べられている、アクセントの長さを構成する単位であり、鈴鹿市方言ではモーラと一致する。

(2) 核がない限り文節の最初から高く続く高起式と、低く始まり核のある拍で上昇し、核がないときは文節末の拍で上昇する低起式の2つの式<sup>4</sup>を持つ。

(1)(2)を図示すると、(3)のようになる。‘  ’は高起式を、‘  ’は低起式であることをそれぞれ表す。また、核を‘  ’で表し、核を持たない語には無核型であることを意味する‘=’を付ける。語例が見つかっていない型には○を用いた。

(3) 鈴鹿市方言のアクセント体系(5拍語まで)

	1拍語	2拍語	3拍語	4拍語	5拍語
H0型	┌蚊=	┌ニワ=	┌ツクエ=	┌ゴチソー=	┌ダイドコロ=
H1型	┌葉	┌ヤ マ	┌オ トコ	┌ザ ブトン	┌ア クセント
H2型		┌○○	┌ニワ シ	┌キガ カリ	┌ミギ ヒダリ
H3型			┌ソノヒ	┌トブク ロ	┌アイコ トバ
H4型				┌アクルヒ	┌モチツキ キ
H5型					┌アタマノケ
L0型	└木=	└ハリ=	└ウサギ=	└オイワイ=	└アリアワセ=
L2型		└アメ	└イチ ゴ	└エハ ガキ	└モチ ハコビ
L3型			└トンボ	└キイチ ゴ	└アカイ ンク
L4型				└アカンボ	└ナガシカ ク
L5型					└○○○○○

ここで全ての型に「アルファベット1字」+「数字1字」の名称を付ける。アルファベットがHならば高起式、Lならば低起式であることを表す。数字は核の位置(1拍目、2拍目…)を表す。無核型の場合数字は0とする。

また、後ろから数えて何拍目に核があるかを問題にする場合に、一と丸囲み数字を用いて核の位置を表す。「一③型」は後ろから数えて3拍目に核のある型を表す。無核である場合④型とする。必要に応じて、「高起式一③型」のように式と組み合わせる。

(3)に示した通り、鈴鹿市方言のアクセント体系はn拍語について、 $2(n+1)-1=2n+1$ 個の型

- ・(高起・低起の2式)→×2
- ・(n拍語に核の位置がn通り+無核型1通り)→n+1
- ・(L1型は、「低く始まること」と「核のある拍で上昇すること」が相反するので存在しない)→-1

が存在する体系である。

(3)の実現する音調表記を、(4)(5)に示す。1つの型について、単独形及び付属語「-が」「-です」が付いた形の3種を示す。‘[’で上昇、‘]’で下降を示す。語例が得られなかった型については、推定される音調表記を示す。

<sup>4</sup> 「高起式」・「低起式」は和田實(1942: 10)の用語である。「高起式」に「平進式」、「低起式」に「上昇式」といった異なる用語をあてる先行研究もある(cf. 上野 1989)が、本論では鈴鹿市方言の記述において平易であるという理由から、和田(1942)の用語を用いる。

## (4) 音調表記・高起式(5拍語まで)

	1拍語		2拍語	3拍語	4拍語	5拍語
	短形	長形				
H0型	[蚊。 [蚊]ガ。 [蚊]デス。	[蚊一。 [蚊一]ガ。 [蚊一]デス。	[ニワ。 [ニワ]ガ。 [ニワ]デス。	[ツクエ。 [ツクエ]ガ。 [ツクエ]デス。	[ゴチソー。 [ゴチソー]ガ。 [ゴチソー]デス。	[ダイドコロ。 [ダイドコロ]ガ。 [ダイドコロ]デス。
H1型	[葉。 [葉]ガ。 [葉]デス。	[葉一。 [葉一]ガ。 [葉一]デス。	[ヤ]マ。 [ヤ]マガ。 [ヤ]マデス。	[オ]トコ。 [オ]トコガ。 [オ]トコデス。	[ザ]ブトン。 [ザ]ブトンガ。 [ザ]ブトンデス。	[ア]クセント。 [ア]クセントガ。 [ア]クセントデス。
H2型			[〇〇。 [〇〇]ガ。 [〇〇]デス。	[ニワ]シ。 [ニワ]シガ。 [ニワ]シデス。	[キガ]カリ。 [キガ]カリガ。 [キガ]カリデス。	[ミギ]ヒダリ。 [ミギ]ヒダリガ。 [ミギ]ヒダリデス。
H3型				[ソノヒ。 [ソノヒ]ガ。 [ソノヒ]デス。	[トブク]ロ。 [トブク]ロガ。 [トブク]ロデス。	[アイコ]トバ。 [アイコ]トバガ。 [アイコ]トバデス。
H4型					[アクルヒ。 [アクルヒ]ガ。 [アクルヒ]デス。	[モチツキ]キ。 [モチツキ]キガ。 [モチツキ]キデス。
H5型						[アタマノケ]。 [アタマノケ]ガ。 [アタマノケ]デス。

## (5) 音調表記・低起式(5拍語まで)

	1拍語		2拍語	3拍語	4拍語	5拍語
	短形	長形				
L0型	木。 木[ガ]。 木デ[ス]。	木一[。 木一[ガ]。 木一デ[ス]。	ハ[リ]。 ハ[リ]ガ。 ハ[リ]デ[ス]。	ウサ[ギ]。 ウサ[ギ]ガ。 ウサ[ギ]デ[ス]。	オイワ[イ]。 オイワ[イ]ガ。 オイワ[イ]デ[ス]。	アリアワ[セ]。 アリアワ[セ]ガ。 アリアワ[セ]デ[ス]。
L2型			ア[メ]。 ア[メ]ガ。 ア[メ]デス。	イ[チ]ゴ。 イ[チ]ゴガ。 イ[チ]ゴデス。	エ[ハ]ガキ。 エ[ハ]ガキガ。 エ[ハ]ガキデス。	モ[チ]ハコビ。 モ[チ]ハコビガ。 モ[チ]ハコビデス。
L3型				トン[ボ]。 トン[ボ]ガ。 トン[ボ]デス。	キイ[チ]ゴ。 キイ[チ]ゴガ。 キイ[チ]ゴデス。	アカ[イ]ンク。 アカ[イ]ンクガ。 アカ[イ]ンクデス。
L4型					アカン[ボ]。 アカン[ボ]ガ。 アカン[ボ]デス。	ナガシ[カ]ク。 ナガシ[カ]クガ。 ナガシ[カ]クデス。
L5型						〇〇〇〇[〇]。 〇〇〇〇[〇]ガ。 〇〇〇〇[〇]デス。

1拍語には母音を延ばさない短形と、母音を1拍分延ばして発音する長形が存在する。

n拍語において、H0型とHn型、L0型とLn型は名詞単独の言い切り形では同じ音調となるが、(4)(5)に示した通り、付属語「-が」「-です」の付いた形では有核型の語においては核による下降が現れ、差異が生まれる。2拍語のL0型とL2型を例にとると、2拍語L0型「針」と2拍語L2型「雨」は単独の言い切り形ではハ[リ]。ア[メ]。と音調は同一となる。しかし、付属語「-が」「-です」を付けるとL0型ではハリ[ガ]。ハリデ[ス]。

と上昇の起こる拍が文節の末尾拍へとずれるのに対し、L2型ではア[メ]ガ。ア[メ]デス。と、単独形と変わらず「雨」の2拍目で上昇が起こり、対立が生まれる。

## 3 後部3拍複合名詞

本節では、「夏祭り」「ゴミ袋」のような後部3拍複合名詞<sup>5</sup>のアクセントについて述べる。

<sup>5</sup> 中井(2002)に掲載されている語を中心とした全1641語。

### 3.1 アクセント型と所属語彙数

まず、表1にアクセント型と各型の所属語彙数を、表2に逆算指定によるアクセント型と各型の所属語彙数を示す。

表1 後部3拍複合名詞のアクセント型と所属語彙数

		0型	1型	2型	3型	4型	5型	6型	7型	8型	9型	10型	計	二単位形
4拍語	高起式	25	26	14	8	0	-	-	-	-	-	-	73	0
	低起式	14	-	15	11	0	-	-	-	-	-	-	40	
5拍語	高起式	75	1	13	368	3	0	-	-	-	-	-	460	7
	低起式	59	-	1	72	74	0	-	-	-	-	-	206	
6拍語	高起式	16	0	0	0	181	0	0	-	-	-	-	197	12
	低起式	1	-	0	0	43	33	0	-	-	-	-	77	
7拍語	高起式	6	0	0	0	0	386	0	0	-	-	-	392	19
	低起式	0	-	0	0	0	73	24	0	-	-	-	97	
8拍語	高起式	0	0	0	0	0	0	27	0	0	-	-	27	2
	低起式	0	-	0	0	0	0	7	1	0	-	-	8	
9拍語	高起式	1	0	0	0	0	0	0	10	0	0	-	11	0
	低起式	0	-	0	0	0	0	0	6	0	0	-	6	
10拍語	高起式	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	5	2
	低起式	0	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
合計	高起式	123	27	27	376	184	386	27	10	5	0	0	1165	42
	低起式	74	-	16	83	117	106	31	7	0	0	0	434	

表2 後部3拍複合名詞の逆算指定によるアクセント型と所属語彙数

	-③型	-②型	①型	-④型	-⑤型	合計
高起式	991	11	123	39	1	1165
低起式	216	143	74	1	0	434
合計	1207	154	197	40	1	1599

表1中の「二単位形」とは、「前後左右」[ゼ]ンゴ+サ[ユ]ウ 3拍H1型+3拍L2型のように、複合名詞のアクセントが一つにまとまらず、二単位に分かれて出るものである。本論では、これらの二単位形はアクセント規則の適用外にあるものとして扱う。

次の3.2節で、これら後部3拍複合名詞のアクセントにどのような規則性がみられるかを考察する。

### 3.2 アクセント規則

後部3拍複合名詞のアクセント規則は、以下の(6)~(8)の通りである。なお、3.1節の表1、表2で示した通り、(6)~(8)の規則に従わない例も一定数みられるが、それらについては3.4節で追って詳述する。

(6) 高起式の場合、-③型で出る。

(7) 低起式の場合、-③型で出るものと-②型で出るものに分かれる。

- (8) (7)において、低起式-②型で出る複合名詞の後部要素は、以下のa~cの特徴を持つ。
- a. 後部要素が複合名詞であり、その単独形が高起式・低起式を問わず-②型である。この場合、高起式においても-②型で出る。
  - b. 後部要素が「-祭り、-休み」のような動詞からの転成名詞である。
  - c. 後部要素が「-油、-袋」など特定の語である。

(9)~(12)に実際の語例を、音調表記と型を付けて示す。

(9) 高起式・低起式ともに-③型で出る例

- うどん(単独形はH0型) 高起式 [ツキミウ]ドン(6拍H4型)、  
[テンプラウ]ドン(7拍H5型)  
低起式 キツネ[ウ]ドン(6拍L4型)、  
ナベヤキ[ウ]ドン(7拍L5型)

(10) 低起式-②型が出現する、後部要素が複合名詞でありその単独形が-②型である例  
(8a)

- 庭師(単独形はH2型) 高起式 [ニセニワ]シ(5拍H4型)  
低起式 ニワカニ[ワ]シ(6拍L5型)

(11) 低起式-②型が出現する、後部要素が動詞からの転成名詞である例(8b)

- 祭り(単独形はH0型) 高起式 [ナツマ]ツリ(5拍H3型)、  
[タナバタマ]ツリ(7拍H5型)  
低起式 アキマ[ツ]リ(5拍L4型)、  
サンダイマ[ツ]リ(7拍L6型)

(12) 低起式-②型が出現する、後部要素が特定の語である例(8c)

- 袋(単独形はH1型) 高起式 [ゴミブ]クロ(5拍H3型)、  
[フトンプ]クロ(6拍H4型)、  
[カイモノブ]クロ(7拍H5型)  
低起式 ポリブ[ク]ロ(5拍L4型)、  
テサゲブ[ク]ロ(6拍L5型)、  
オマモリブ[ク]ロ(7拍L6型)

高起式の場合、(7)で述べた通り-③型で出るのが基本である。

低起式の場合は、高起式と同様に-③型で出るのが基本であるが、後部要素が(8)で挙げたような特徴を持つ場合、有標な-②型で出る。低起式-②型で出るものについて、次節で詳細を述べる。

### 3.3 低起式-②型で出る語について

低起式-②型で出る語は、(8)で述べた通り、

- a. 後部要素が複合名詞であり、その単独形が高起式・低起式を問わず一②型である。  
この場合、高起式においても一②型で出る。
- b. 後部要素が「-祭り、-休み」のような動詞からの転成名詞である。
- c. 後部要素が「-油、-袋」など特定の語である。

の特徴を持つ。本節では、上記 a~c のそれぞれについて語例を挙げつつ詳述する。  
まず、(8a) に該当する後部要素を (13) に示す。

- (13) 後部要素が複合名詞であり、その単独形が高起式・低起式を問わず一②型である後部要素 (全 4 例) :

後部要素	単独形	語例
-個人	L2 型	個人個人
-四角	L2 型	真四角、長四角
-庭師	H2 型	にわか庭師      cf. 偽庭師 [ニセニワ] シ (5 拍 H4 型)
-針師	L2 型	にわか針師

(13) に示した後部要素全 4 例は、それ自身が複合名詞であり、複合名詞全体の核の位置は後部要素の核に由来すると考えられる。

なお、「後部要素が既に複合語である場合、その核が保存される」という現象は、細かい差異はあるものの、東京方言や現代京都市方言にも存在する (上野 1997: 239)。

次に、(8b) に該当する後部要素が動詞からの転成名詞である例を扱う。まず、表 3 に、低起式一②型および低起式一③型で出た語について、後部要素が転成名詞であるものとそうでないものの数を示す。

表 3 低起式で出る後部 3 拍複合名詞の後部要素の語種

	後部要素の語種		
	転成名詞	非転成名詞	合計
低起式一②型	95	48	143
低起式一③型	31	185	216
合計	126	233	359

表 3 に示した通り、「低起式の複合語において、後部要素が動詞からの転成名詞であると一②型で出る」という傾向が見られる。ただし、後部要素が転成名詞の場合でも低起式一③型が 31 語出ている。

(14) に、低起式の語において一②型のみが現れた後部要素を、(15) に一②型と一③型が両方現れた後部要素を単独形とともに示す。

(14) 低起式-②型のみ出るもの(全52例)

四段動詞連用形	40例	H0型	-明かし、-上がり、-当たり、-踊り、-返し、-屈み、 -重ね、-飾り、-かじり、-変わり、-嫌い、-暮らし、 -好み、-たたき、-違い、-潰し、-詰まり、-はざみ、 -ひたし、-太り、-震い、-曲がり、-回し、-回り、 -見舞い、-結び、-めぐり、-揺すり
		H1型	-掛かり、-係、-騒ぎ、-触り、-拗い、-揃い、 -倒し、-試し、-払い、-開き、-休み
		L0型	-慣らし
一段動詞連用形	10例	H0型	-集め、-合わせ、-重ね、-炒め、-かぶれ、-崩れ、 -比べ、-並べ、-外れ
		H1型	-疲れ
未然形+ズ	2例	H1型	-知らず
		L2型	-食わず

(15) 低起式-②型と-③型が両方出るもの(全6例)

四段動詞連用形	6例	H0型	-遊び、-踊り、-祭り
		H1型	-絞り、-話
		L0型	-参り

なお、転成名詞で低起式-③型で出る後部要素も存在する<sup>6</sup>。

表4に、(14)~(15)に挙げた後部要素単独形と複合名詞の型の連関を示す。

表4 転成名詞の単独形

	H0型	H1型	L0型	L2型	合計
低起式-②型	37	13	1	1	52
低起式-②型/-③型	3	2	1	0	6
合計	40	15	2	1	58

表4に示した通り、(8a)の複合名詞のケースとは異なり、後部要素単独形は低起式-②型の出現に関与していない。また、-②型のみで出るか-②型/-③型の両方で出るかのパターン選択にも関わっていない。

続いて、(8c)に該当する後部要素を(16)に示す。表5に後部要素単独形の型ごとの数をまとめる。

<sup>6</sup> 低起式-③型でのみ出る後部要素は全18例で、以下の通りである。

四段動詞連用形	13例	H0型	-すまし、-使い、-にぎり、-寝入り、-のぼり、-拾い、 -更かし、-戻り
		H1型	-思い、-さばき、-さらい、-通り、-ねだり
一段動詞連用形	4例	H0型	-生まれ、-任せ
		H1型	-離れ、-別れ
未然形+ズ	1例	H1型	-足らず

後部要素の単独形に着目してまとめると、以下のようになる。

	H0型	H1型	L0型	L2型	計
低起式-③型	10	8	0	0	18

(16) 低起式の複合名詞の後部要素になると-②型で出るもの(全25種)

後部要素	単独形	語例	cf. 同じ後部要素の 低起式-③型で出た例
-頭	H1型	禿頭	坊主頭
-油	H0型	機械油、サラダ油	種油、椿油
-いちご	L2型	木いちご、野いちご	
-兎	L0型	白兎	
-加減	H0型	いい加減	
-刀	H1型	小刀	
-鞆	H0型	手提げ鞆	旅行鞆
-瓦	H1型	屋根瓦	
-葉	L2型	粉葉、通じ葉	
-車	H0型	荷車、糸車、井戸車、肩車、おんば車	
-式部	H1型	紫式部	
-互い	L0型	お互い	
-狸	L2型	古狸	豆狸
-卵	L2型	生卵、溶き卵	
-団子	L0型	きび団子	糸切り団子
-強さ	L2型	辛抱強さ	
-戸棚	H0型	食器戸棚	
-畑	L2型	ネギ畑、麦畑、いちご畑、りんご畑	
-袋	H1型	ポリ袋、手提げ袋、お守り袋、堪忍袋、 ビニール袋、持ち出し袋	
-ミミズ	L0型	糸ミミズ	
-土産	H0型	お土産	北海道土産
-娘	H1型	わがまま娘	
-役所	H0型	市役所、区役所	
-ヤナギ	H0型	カワヤナギ	イトヤナギ、ネコヤナギ
-曜日	L0型	金曜日、水曜日	何曜日

表5 (16)の単独形

H0型	H1型	L0型	L2型	合計
8	6	5	6	25

これらの語も、低起式の複合名詞の後部要素になると-②型で出る性質を持っていると考えられる。転成名詞の場合と同様に、同じ後部要素を持つ複合語全体をみると-③型でも出るものも含まれる。表5で示したように、後部要素の単独形は関与していない。

最後に、低起式-②型が、標準語でみられるような、特殊モーラが音韻的に弱くアクセント核を担えないために核の位置が左にずれる現象<sup>7</sup>と照らし合わせて、低起式-②型の

<sup>7</sup> 上野(2003: 74)では標準語において-③型が基本である外来語を例に取り、  
語末から3拍目が通常のモーラ -③型 /オーストラ'リア/、/ロサンゼ'ルス/  
語末から3拍目が特殊モーラ -④型 /ワシ'ントン/、/バンク'ーパー/  
のように核の位置が1つ左にずれる例が挙げられている。



出現に特殊モーラが関与しているか否かをみる。後部要素が3拍であるという前提で、特殊モーラによって-②型と-③型が分かれる現象が起こるとするならば、「低起式の語においては-②型が基本で、語末から2拍目が特殊モーラの場合、核の位置が左にずれて-③型で出る」という仮説を立てることになる。これを表6で検証する。

表6 特殊モーラと複合名詞の型(○は通常のモーラ1つ、Mは特殊モーラ1つを表す)

	-○○○	-○M○	合計
低起式-③型	130	86	216
低起式-②型	139	4	143
合計	269	90	359

表6で示したように、まず語末から2拍目が特殊モーラでありながら低起式-②型で出る例が4語(きび団子、金曜日、水曜日、金比羅参り)出現している。

また、語末から2拍目が通常のモーラであっても-③型が出現している例が130語出ている。よって、先に立てた仮説は成り立たず、-②型の出現に特殊モーラは関与していないと言える。

### 3.4 アクセント規則の例外

本節では高起式-③型・低起式-③型・低起式-②型以外の型で出る、アクセント規則の例外となる語について述べる。

#### 3.4.1 ①型の出現について

①型は高起式で123例、低起式で74例出現しているが、表1に示した通り、拍数の短いものに集中して出現しており、拍数が長くなると出現頻度が極端に落ちる型であるため、①型の出現は生産的な規則としては認めないこととする。

#### 3.4.2 高起式-②型の出現について

高起式-②型は、以下の全11例が得られている。

4拍語 8例 気休め、気遣い、ご苦労、血だらけ、血眼、戸袋、寝心地、真心

5拍語 3例 偽庭師、水飲み場、餅つき器

このうち、「偽庭師」は(8a)で述べた、後部要素が-②型の複合語であるケースである。「餅つき器」、「水飲み場」については、それぞれ「餅つき+器」、「水飲み+場」とアクセントの上で後部1拍複合名詞として振る舞って-②型で出ると解釈すると、後部3拍複合名詞アクセント規則の例外からは外れる。なお、後部1拍複合名詞は-②型で出ると①型で出るとに大別される。

残る4拍語の全8例については、語構造の上からは説明が付かない、個別的な例外であると考えられる。

### 3.4.3 一④型の出現について

一④型は高起式で 39 例、低起式で 1 例出現しており、以下の a~d の 4 つに大別することができる。

- a. 前部要素が 1 拍である (4 拍 H1 型である) もの (全 26 例<sup>8</sup>)。
- b. 前部要素が「一(ひと)」、「二(ふた)」であるもの (全 9 例<sup>9</sup>)。
- c. 前部要素が 2 拍である並列複合語であるもの (全 2 例<sup>10</sup>)。
- d. a~c のどれにもあてはまらない例外 (全 3 例<sup>11</sup>)。

a は、前部要素が 1 拍であるという拍数の短さが関与していると考えられる。b、c は語構造から特殊な型である説明を付けることができる。d の 2 例については、個別に例外的な型で出ているとみなす。

### 3.4.4 一⑤型の出現について

一⑤型は、以下に示す 1 例のみ得られた。

真っ盛り (5 拍 H1 型)

「真っ盛り」の一⑤型は、語末から 4 拍目が促音であるために生じた、3.4.3 節の d で述べた個別的な例外の一④型に準じる型としてとらえられうる<sup>12</sup>が、例外的な型で出ていることに変わりはない。

## 4 古形の保持としての低起式一②型

3.2 節で述べた低起式の語についての鈴鹿市方言のアクセント規則 (7) は、(17) に示す現代京都市方言の後部 3 拍複合名詞アクセント規則と異なる。

(17) 現代京都市方言では、後部 3 拍複合名詞は高起式・低起式を問わず一③型で出る (中井 1987: 48)。

鈴鹿市方言における、現代京都市方言にみられない低起式一②型の出現は、(18) の院政期京都方言のアクセント規則が保持されているととらえることができる。

<sup>8</sup> 木登り、小切手、小細工、五時間、小包み、座布団、字配り、戸締まり、ど忘れ、荷造り、歯応え、羽二重、歯ブラシ、火遊び、日帰り、火加減、日めくり、不機嫌、身動き、身勝手、見応え、目移り、目印、矢印、四時間、夜明かし。以上 26 例は全て H1 型。

<sup>9</sup> 一思い、一苦勞、一つかみ、一区切り、一揃い、一昔、一休み；二通り、二回り。以上 9 例は全て H2 型。

<sup>10</sup> 行き帰り (5 拍 H2 型)、右左 (5 拍 H2 型)。

<sup>11</sup> 頬被り (5 拍 H2 型)、松林 (5 拍 H2 型)、持ち運び (5 拍 L2 型)。

<sup>12</sup> なお、他の「真っ-」を前部要素に持つ語例は、真っ平ら、真っ裸、真っ昼間、真っ二つの 4 例がいずれも 5 拍 H3 型(一③型)というアクセント規則に従った型で出ている。

(18) 院政期京都方言では、高起式・低起式を問わず語末から数えて2拍目に下げ核がおかれる<sup>13</sup>(桜井茂治 1975: 169、佐藤栄作 1998: 559)。

(18) に示した古形から、高起式・低起式問わず全ての語が-②型から-③型へと、核の位置が左へずれる音変化を経てきたのが現代京都市方言であるのに対し、高起式では全ての語に核の位置が左へずれる音変化が起こったが、低起式の語では一部の語を-②型のまま残して-③型へ変化した状態が鈴鹿市方言の状態であるととらえられる。

鈴鹿市方言が現代京都市方言と同じく一旦高起式・低起式ともに-③型に音変化を終えた段階を経て、その後鈴鹿市方言内部で低起式の一部の語について-②型への変化が起こった可能性も排除できないが、-②型への変化を起こす契機となる条件が不明であるため、本論では低起式-②型は古形が保持されたものととらえる。

## 5 まとめ

本論では、三重県鈴鹿市方言の後部3拍複合名詞アクセント規則について述べた。現代京都市方言の規則と異なる点は低起式の語において-②型が一定数出現することであり、-②型の出現に後部要素単独形や特殊モーラは関与しないこと、鈴鹿市方言において古形が保持されていると考えられることを示した。

ただし、低起式の語において-③型と-②型に分かれる条件の詳細は未だ不明な点が多い。今後の課題としたい。

---

<sup>13</sup> 院政期京都方言のアクセント体系に付いては、2種の式と2種の核を用いる上野(1977: 314)の解釈をとる。

## 参考文献

- 上野善道(1977)「日本語のアクセント」『岩波講座日本語 5 音韻』岩波書店: 281-321.  
——(1987)「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(2)」『日本学士院紀要』42-1: 15-70.  
——(1989)「日本語のアクセント」杉藤美代子編『講座日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻(上)』明治書院: 178-205.  
——(1992)「昇り核について」『音声学会会報』199: 1-14.  
——(1997)「複合名詞から見た日本語諸方言のアクセント」杉藤美代子監修, 国広哲弥・廣瀬肇・河野守夫編『日本語音声 2 アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂: 231-270.  
——(2003)「アクセントの体系と仕組み」『朝倉日本語講座 3 音声・音韻』朝倉書店: 61-84.  
——(2006)「日本語アクセントの再建」『言語研究』130: 1-42.  
桜井茂治(1975)『古代日本語アクセント史論考』桜楓社.  
佐藤栄作(1998)「語構造とアクセント型」秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木豊『日本語アクセント史総合資料 研究篇』東京堂出版: 552-562.  
中井幸比古(1987)「現代京都市方言のアクセント資料(2)」『アジア・アフリカ文法研究』16: 45-98.  
——(2002)『京阪系アクセント辞典』勉誠出版.  
和田實(1942)「近畿アクセントに於ける名詞の複合形態」『音声学協学会報』71: 10-13.

The Accent of Compound Nouns Ending in Three-Mora Elements  
in the Suzuka Dialect of Japanese (Mie Prefecture)  
HIRATA Shu

Keywords: Suzuka dialect of Japanese, compound nouns ending in three-mora elements, pattern -3, pattern -2

### Abstract

The present author conducted fieldwork on the accent of the Suzuka dialect of Japanese in Suzuka, Mie Prefecture, in the years 2008-2010. Based on the obtained data, the accent rules of compound nouns ending in three-mora elements in the Suzuka dialect can be summarized as follows: 1. In the high-onset (kouki-shiki) group, the kernel (the peak after which the pitch falls) falls on the antepenultimate mora (pattern -3). 2. In the low-onset (teiki-shiki) group, the kernel falls on the antepenultimate mora in some words, while it falls on the penultimate mora in the others (pattern -2). The accent of the last element and the special morae (Q, N etc.) therein do not affect the choice of the accent pattern of the compound nouns. Rule 2. is different from the rule of the Kyoto dialect and we argue that the rule of the Kyoto dialect in the Heian period is partially preserved in the Suzuka dialect.

(ひらた・しゅう 博士課程)